



## ■ 第 30 回聖路加看護学会学術大会 -優秀演題賞の紹介- 1/3

### <研究発表>

#### がん薬物療法に伴うがん患者の爪変化に対する看護支援：スコーピングレビュー

栗林 美憂（国立がん研究センター中央病院/聖路加国際大学大学院 看護学研究科）

小林 成光（東邦大学看護学部）

林 直子（聖路加国際大学）

この度、「がん薬物療法に伴うがん患者の爪変化に対する看護支援：スコーピングレビュー」に対し、優秀演題賞をいただき、大変光栄に存じます。これまでご指導いただいた先生方に心より感謝申し上げます。がん薬物療法を受ける患者にとって、爪の変化は疼痛や機能障害を伴いやすく、QOL を低下させる副作用であることが指摘されています。そこで本研究では、がん薬物療法に伴う爪変化に対して実施されている看護支援を明らかにすることを目的に、スコーピングレビューを行いました。

5つの電子データベースを用いて文献検索を行い、最終的に13件を採択しました。抽出された支援は、①冷却療法、②保護・保湿、③面談による教育セッション、④複合的支援の4種類でした。

冷却療法では、薬物療法中に冷却手袋や靴下を用いて末梢部を冷却する方法が用いられ、温度設定は-30℃から10℃まで幅がありましたが、7件中5件で爪変化の有意な減少が示されていました。一方で、冷たさによる不快感から中断に至るケースも報告されており、患者の苦痛とのバランスを考慮した方法の検討が求められます。

保護・保湿では、アルガンオイルやキューティクルオイルを1日1~3回塗布する介入が行われ、4件すべてで予防効果が認められました。研究で使用された製品と同等品の入手が難しい場合もありますが、手軽に実施できる支援として臨床で応用しやすいと考えられます。

面談による教育セッションでは、パンフレットの配布に加え、患者のニーズに応じた情報提供が行われていました。介入は薬物療法開始から3サイクル終了までの期間に計3回実施され、C-SASによる評価で爪の副作用頻度が有意に低下していました。爪変化は治療の蓄積により顕著になるため、サイクルに合わせた面談は有効と考えられますが、1回あたりの面談時間の短縮が課題です。

複合的支援では、看護師による教育、ウェブサイトでの情報提供、電話相談、自宅訪問を組み合わせたプログラムが実施されていました。介入頻度が高く時間も要するため、地域との連携体制や非対面支援の整備が重要と考えられます。

以上より、4種類の看護支援はいずれも爪変化への対応として有用である可能性が示唆されました。しかし、臨床での実施には物品の確保、時間的制約、体制整備などの課題があり、各施設の状況に応じた検討が必要です。今回頂いた賞を励みに、臨床で活用可能な看護支援の実践と普及に努めてまいります。

#### 抽出された爪変化に対する支援内容

冷却療法 (n=7)	<ul style="list-style-type: none"><li>冷却手袋や靴下などを用い、薬物療法実施中に冷却する支援</li><li>冷却温度や時間は文献により大きく異なっていた (温度：-30℃~+10℃、時間：3~6時間)</li></ul>
保湿・保護 (n=4)	<ul style="list-style-type: none"><li>アルガンオイルやキューティクルオイル、植物系原料の爪用塗布剤などが用いられた</li><li>薬物療法実施期間中に患者が1日1~3回の範囲で塗布する支援</li></ul>
面談による 教育セッション (n=1)	<ul style="list-style-type: none"><li>30~45分の教育セッションを患者・家族に複数回行う支援</li><li>薬物治療の初回投与前、2・3サイクル目の投与前に実施</li></ul>
複合的な支援 (n=1)	<ul style="list-style-type: none"><li>院内での副作用の教育、電話・Webカウンセリング、自宅訪問を組み合わせた支援</li><li>電話・Webカウンセリングは平均12回、自宅訪問は3回実施</li></ul>

73

## ■ 第 30 回聖路加看護学会学術大会 -優秀演題賞の紹介- 2/3

### <研究発表>

#### 障害や病いのある看護職の就業体験（第 1 報）

#### ～DIPEX-Japan「障害ナースの語り」データの 2 次分析～

瀬戸山 陽子（東京医科大学教育 IR センター）

射場 典子（聖路加国際大学大学院）

森田 夏実（認定 NPO 法人 健康と病の語り デイパックス・ジャパン）

このたび本演題に対し賞を賜り、誠にありがとうございました。障害や病いをもちながら看護職として就業しているご自身の体験をお話くださった 20 名の方々に、心から感謝申し上げます。お話しいただいた方々は、内部障害や聴覚障害、肢体不自由、発達障害、精神障害、重複障害など様々な障害がある看護職の皆様です。【職場での環境調整や配慮】というカテゴリーでは<就職時の障害や配慮に関する相談> <復職時の働き方に関する相談> <具体的な配慮の内容> <管理職にまつわる調整> <周囲への依頼やチームワーク>といった内容が見いだされました。

これまで様々な研究から、障害のある人となない人では医療アクセスに差があり、それが健康格差につながる事が示されてきました（Iezzoni, 2020）。社会自体がそうですが、医療も多数派向けに作られており、多数派ではない人がかかりにくくなっています。看護教育でも障害のない人がある日病いになる事例を多く学びますが、長く障害と共に生きている人が別の疾患で医療機関にかかることは、あまり想定されてきませんでした。障害のある看護職や医療職の存在は、共に働く同僚に多くの気づきをもたらし、障害の有無にかかわらず誰もがかかりやすい医療のために必要と言われています（GMC, 2021）。障害のある人の医療アクセスの改善には、当事者体験をもつ障害のある医療職の存在がキーとなるかもしれません。今回の研究の出発点には、こういった思いがありました。

障害のある看護職の方は、就業をする上で様々な壁に直面していました。それらは物理的な壁だけではなく、法律や規則などの制度や、「なんとなく障害のある人を想定していない」といった目に見えない文化や慣習にも及びます。その一方で、一人ひとりが、職場で柔軟に調整したり多様な工夫をしたりしていることが語られました。障害のある看護職の方が働き続け、医療の現場そのものが、障害の有無にかかわらずアクセスしやすい環境や文化に変化していくことを目指して、今後も研究を続けていきたいと思えます。

本研究は、障害や病いのある当事者の方にお話を伺い、映像や音声でウェブサイト上に公開する DIPEX-Japan（デイパックス・ジャパン）の取り組みの一つで、「障害ナースの語り」のデータを二次分析したものです。ウェブページでは、当事者の方々の映像や音声を視聴することが可能ですのでぜひご覧いただけたら幸いです。

Iezzoni, L. and N. Agaronnik, (2021) Healthcare Disparities for Individuals with Disability: Informing the Practice, in Disability as Diversity, L. Meeks, Editor, Springer: Switzerland.  
General Medical Council (2021), <https://www.gmc-uk.org/education/standards-guidance-and-curricula/guidance/welcomed-and-valued> <2026-1-20 accessed>



「障害ナースの語り」ウェブページ <https://www.dipex-j.org/shougai-nurse/>

障害ナースの体験談を動画や音声でお届けするウェブサイトです  
[www.dipex-j.org/shougai-nurse](http://www.dipex-j.org/shougai-nurse)  
データベース Database of Individual Patient Experiences  
障害ナースの語り  
体験したから伝えたいことがある  
体験した人にしか語れないことがある  
健康と病いの語りデータベース DIPEX Japan

## ■ 第 30 回聖路加看護学会学術大会 -優秀演題賞の紹介- 3/3

### ＜実践報告＞

#### 認知症当事者の語りの動画視聴を取り入れた健康講座の実践報告

寺本 健太（聖路加国際大学大学院看護学研究科博士後期課程、国際医療福祉大学成田看護学部）

射場 典子（聖路加国際大学大学院）

この度は、優秀演題賞（実践報告）を賜り、心より御礼申し上げます。私は、2023 年度に、本学の「健康と病いの語り概論」を受講しました。あわせて、職場であった地域包括支援センターにて認知症サポーター養成講座を担当する中で、参加者の多くが認知症を自分事ではなく他人事として捉え、「認知症を予防したい」と考えている現状に気づきました。これを契機に、現場で感じた課題意識から、認知症の語りを用いた研究に取り組み始めました。講義を通して実際に「語り」というデータに触れ、多様な思いに向き合う経験を得たことから、2024 年度聖路加看護学会看護実践科学研究助成を受け、試作版動画教材の作成を計画しました。

本演題では、「聖路加健康ナビスポット：るかなび」の出張講座の内容を中心に報告しました。地域で暮らす住民の方々のサロンに赴き、健康講座として「認知症」をテーマにお話しする機会をいただきました。本講座は、People-Centered Care の考えに基づき、当事者が主体となるケアの実践に向けて、認知症の人への理解を深めることを目的として作成しました。先行研究を踏まえ、講座内容は①地域共生社会をふまえた地域の現状、②認知症とは何か、③当事者への関わり方、④当事者の語りの動画視聴、⑤意見交換の 5 つで構成しました。事前の打ち合わせを重ねながら、講座内容を検討・作成しました。

講座では、DIPEX-Japan が公開している「認知症の語り」を聴く時間を設け、その後、参加者がどのように考え、感じたのかを共有していただきました。その過程で、参加者自身の心の中にある認知症への思いに気づき、他者と交流することで理解がより深まったと考察しました。動画を通じた体験ではありましたが、語り手である当事者と出会い、その語りに触れることで、参加者一人ひとりの体験が生まれ、さらに周囲の人々へと伝わり、循環していく変化が生じることを願っています。

今回頂いた賞を励みに、認知症になっても安心して老いていけるコミュニティづくりに貢献できるよう、今後も認知症の語りを用いた研究を継続してまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

### 実践内容

本講座では、People-Centered Careの考えに基づいて、当事者が主体となるケアの実践に向けて認知症の人に関する理解が深まることを目的とした。先行研究を参考に講座の内容は①地域共生社会をふまえた地域の現状、②認知症とは、③当事者への関わり方、④当事者の語りの動画視聴、⑤意見交換とした。当事者の語り動画は、認定NPO 法人健康と病いの語りDIPEX-Japanが公開している若年性認知症当事者2名を選択した。講座の時間は60分、対面参加型で、資料配布しスライドを示しながら進めた。講座終了後にアンケートを実施し、回答は自由意思であること、無記名とし、個人を特定しない形で集計し学会報告すること、提出にて同意とみなすことを記載し、口頭でも説明した。

#### 本人の思いを知る・イメージするには

- ・ 本人の抱く思い
- ・ 記憶障害による焦燥感
- ・ 判断力や決断力の低下による不安感
- ・ コミュニケーションの困難による孤独感

お年寄りや高齢者のトイレで出口がわからなくて困っていた。自分もしやれたデザインの色やトイレの壁に差があるので、認知症の人に使いやすいついれを作ってもらいたい

普通に話してくれるのが一番ありがたい。本人が気づかずおかしなことを言ったりやったりしている、きりがなく教えてくれるのが一番シンドクなくて良い

新日本生命 認知症になっても本人の気持ちとは？理解して対応するための6つのポイント  
https://www.nissai.co.jp/press/2023/03/23/20230323\_01.html  
認知症の語り | https://www.dipec.jp/contents/



・ピープル・セントラード・ケア(PCC)  
・市民が主体となり医療従事者とパートナーを組み、自分の健康課題の改善に向けて取り組むこと  
・重要なポイントは、「市民と保健医療従事者とのパートナーシップ」  
8つの要素「①互いを理解する」「②互いを信頼する」「③互いを尊重する」「④互いの持ち味を活かす」「⑤互いに役割を担う」「⑥共に課題を乗り越える」「⑦意思決定を共有する」「⑧共に学ぶ」が含まれている。  
・PCCを学ぶ | <https://p-cc.jp/>

## ■ 第30回聖路加看護学会学術大会 -若葉賞の紹介-

### <卒論発表>

#### 助産師による在日外国人妊産婦へのケアの実際と課題

有吉 夏紀（京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻先端看護科学コース高度実践助産学系）

この度、「助産師による在日外国人妊産婦へのケアの実際と課題」の演題に対し、若葉賞を賜り、大変光栄に存じます。

本研究では、産科病棟に勤務する助産師2名にインタビューを実施し、在日外国妊産婦へのケアの実際と、その中で助産師が直面している課題について分析しました。その結果、在日外国人妊産婦だけでなく、ケア提供者である助産師もまた、ケア提供の過程において言語的・文化的な差異を感じていることが明らかになりました。特に、妊娠期・分娩期・産褥期の全期間を通じて、通訳に関する困難やコミュニケーション上の問題が生じており、それによりケアに通常以上の時間と労力を要したり、ケアそのものを十分に実施できない実態が見えてきました。在日外国人妊産婦が日本という異文化で快適に周産期を送るためには、ケア提供者である助産師が抱える課題についても克服していく必要があります。

昨今、在日外国人妊産婦は増加傾向にあります。私自身、本研究でのインタビューを通じて、多様性を十分に受容できていない医療システムの現状や、支援の中で様々なジレンマを抱える助産師の実際の声に触れ、以前にも増して本テーマへの問題意識を抱くようになりました。助産師には、一人一人の出産がより良い体験となるよう支援する使命があります。助産師を目指す一学生として、また一日本人として、在日外国人妊産婦へのケアの質を問い直すことは、非常に意義深いことだと感じています。今後も本テーマに継続して取り組み、在日外国人妊産婦への質の高いケア実現に貢献できるよう、より一層精進して参りたいと思います。

## 研究の結果

対象者の属性

助産師A



30代  
助産師歴10年  
私立の地域周産期母子  
医療センター

助産師B



40代  
助産師歴18年  
公立の総合周産期母子  
医療センター

	ケアの実際	ケアの課題
妊娠期	【対象者の母国語を使用したコミュニケーションの支援】 【出産育児に向けた準備や環境整備に対する支援】 【助産師と話し合う時間を取り、個別の要望や意向を聞く】 【日本人妊婦に対するケアと同様のケア】	【分娩期に向けた十分な準備が困難】 【通訳に関する困難】 【ケアに時間と労力がかかる】 【言葉の違いより文化の違いに難しさを感じる】 【医療費制度が適切に運用されない】 【妊婦の情報収集が困難】
分娩期	【言葉の壁を感じにくくなった】 【対象者にあった個別のケアをその都度柔軟に実施している】 【日本人妊婦に対するケアと同様のケア】	【十分なコミュニケーションが困難】 【ケアに時間と労力がかかる】 【全ての要求に対応できないことに対する葛藤】 【言葉が分からなくても、分娩介助できている】
産褥期	【対象者の文化を受け入れ尊重する】 【対象者の母国語を使用したコミュニケーションの支援】 【新生児の健康を最優先とする】 【日本人産婦に対するケアと同様のケア】	【言葉が通じないことにより実施できない、あるいは不十分なケアがある】 【ケアに時間と労力がかかる】 【病院の決まりと在日外国人産婦の文化との間で葛藤する】 【文化的背景に配慮したケアが困難】 【スタッフ個人や対象者個人の能力や状況に頼った対応】

## ■ 世界トップ 2% 科学者リスト選出にあたって

大田 えりか（聖路加国際大学大学院）

このたび、スタンフォード大学とエルゼビア社が公表する「世界トップ 2% 科学者リスト」において、Single recent year impact（単年）部門で 6 年連続、Career-long impact（生涯影響）部門につきましても継続して選出いただきました。このような身に余る評価をいただきましたこと、驚きとともに心より感謝申し上げます。

この成果は、決して私個人の力によるものではありません。これまで共に試行錯誤しながら研究に取り組んできた大学院生や学生の皆さん、国内外の共同研究者の方々、そして臨床現場でご協力くださった皆さまのお力添えがあってこそのものであります。また、日頃から温かく支えてくださる同僚の先生方、そして共に研鑽を積める聖路加という環境に、深く御礼申し上げます。

私は助産師として、母子保健や女性の一生の健康を支えることをテーマに研究を続けてまいりました。国際看護学を担当する教員としては、グローバルヘルスの視点から資源の限られた地域や低・中所得国を含む世界の人々の健康課題に取り組んでいます。現在はコクランのシニアエディターを務めるほか、世界的な疾病負担研究（GBD）のネットワークにも参加させていただき、世界標準となるエビデンスの構築や、客観的なデータに基づく実践（EBP）の推進に微力ながら力を注いでいます。

また現在は、これらの知見を活かした新たな取り組みとして、スタンフォード大学と北海道大学との共同研究による「日本人のウェルビーイングを多面的に捉えるための尺度開発」を行っています。個人の主観だけでなく、生活や社会環境も含めて「よりよく生きるとは何か」を科学的に明らかにすることを目指しています。

研究とは、論文を書くこと自体がゴールではなく、「人々の人生や社会を少しでもよくする」ための手段であると考えています。学生や現場の方々との対話から生まれる日々の小さな気づきこそが、私の研究の原動力です。

今回の選出を励みに、今後も教育・研究・社会連携を通じて、誰もが自分らしく健康に生きられる社会の実現に貢献してまいります。学会員の皆さまにおかれましても、引き続きご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

## ■ 広報委員会からのお知らせ

近年、本学会ホームページの訪問者には、日本国内のみならず、米国、マレーシア、英国、中国など海外からのアクセスも継続的に一定数確認されております。このような状況を踏まえ、国際的な情報発信の強化が重要であると考え、現在、英語版のホームページの作成を進めております。学会概要等を英語で提供できるよう準備を進めており、公開に向け最終調整を行っております。準備が整い次第、改めてご案内申し上げます。公開を楽しみにお待ちしております。引き続きご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

（担当：廣田千穂、賀数勝太、増澤祐子、池口佳子、海老原樹恵、飯岡由紀子）

## ■ 学術交流委員会からのお知らせ

※2025 年度学術交流集會を開催します！

テーマ：地域共生社会と看護～実践家の活動と実践知

講師：川添高志氏（ケアプロ株式会社 代表）

木村千尋氏（雲南市立病院 診療看護師）

日時：2026 年 3 月 21 日（土）13:00～14:30

オンライン開催（会員無料、非会員 2000 円、参加証明書あり）

※オンデマンド配信あり（参加証明証なし）

昨年の学術交流集會では「地域包括ケアシステム」について筒井孝子先生より、その意義や取り組み、基盤となる理論について講義いただき、看護の力を地域包括システムにどのようにコミットさせていくか考える機会をもちました。そこから今回は、さらに超高齢多死社会を迎えるための、地域共生の実現に向けた先進的な看護実践をお二人の講師よりご紹介いただきます。それぞれの持ち場でさらにできることの発想が刺激されることと思います。

さまざまな領域、実践の場で看護の力が求められています。地域で生きる人への看護をしている皆さんと看護の力をさらに生かせるか考えていきたいと思ひます。多くの方のご参加をお待ちしています。

（担当：梅田恵、宇都宮明美、鈴木美穂、佐藤直子、中山祐紀子、松本文奈、山本真実、監物佳子）

## ■ 選挙管理委員会からのお知らせ

日頃より選挙管理委員会の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。定款および評議員・役員選挙規程に基づき、2025 年 10 月 25 日～11 月 9 日の期間、本学会の理事選挙（7 名選出）を実施いたしました。選挙人は 2028 年定時評議員会終結までを任期とする評議員 29 名で、そのうち 25 名が被選挙人です。会員の皆様のご協力により、円滑に選挙を実施できましたことに深くお礼申し上げます。

（担当：射場典子、相澤恵子、青木美紀子、浦口真奈美）

## ■ 学会誌編集委員会からのお知らせ

現在本学会誌は第 29 巻が発行されており、研究報告 3 篇が web にて公開されています。

本学会誌は研究領域に限らない幅広い論文を発表できる場となっており、さまざまな研究を受け付けております。原稿の種類は総説・論説・原著・研究報告・実践報告・資料の 6 種類となっています。保健・医療・看護等の実践活動については、実践報告として投稿することもできます。臨床で活躍する皆さま、実践で取り組まれたことを実践報告として、ぜひ投稿していただければと思ひます。

（担当：高橋奈津子、大坂和可子、飯田真理子、川端愛、高山千春、三浦友理子、榎戸文子、加藤木真史、沢口恵、蜂ヶ崎令子、山岡栄里）

2025年度聖路加看護学会  
学術交流集會  
地域共生社会と看護  
実践家の活動と実践知

川添高志氏 (代表, ケアプロ株式会社)  
木村千尋氏 (診療看護師, 雲南市立病院)

2026 3.21 SAT  
13:00-14:30

開催趣旨: 昨年度の交流集會では地域包括ケアの実現に必要な理論的知識を深めました。今年度は、地域共生社会の実現に向けて看護職が行っている活動と実践知についてご講演いただき、参加者と意見交換をしたいと思います。

方法: オンライン (ZOOM)  
参加費: 学会員無料・非学会員2000円  
定員: 先着200名  
申込: リンクまたはQRコードよりお申込みください 1申込QR  
[https://app.payvent.net/embedded\\_forms/show/68d94b38b04816826935ae171](https://app.payvent.net/embedded_forms/show/68d94b38b04816826935ae171)

JSNR 一般社団法人 聖路加看護学会  
The Japan Society for Nursing Research

お申し込みはこちら↓



## ■ 高度実践看護開発検討委員会からのお知らせ

今年度の高度看護実践開発検討委員会主催のオンライン研修は、「高度実践看護師が活躍する組織」をテーマに、2025年12月13日（土）に開催しました。

講師は、お二人で、大友 晋氏（聖路加看護大学老年看護学助教、老人看護専門看護師、DNP）、田村 富美子氏（聖路加国際病院 副看護部長/急性・重症患者看護専門看護師）をお迎えしました。

大友氏からは「チーム活動における APN の役割」と題して、APN としての多職種チーム活動のマネジメントについて、「高齢者チーム活動」実践例と、「認知症ケアチーム活動」実践例について、それぞれの取り組みのきっかけから準備、経緯についてお話をいただきました。実践経緯の中では多職種チームをどのように作ってこられたのか、ご自身が大切にされたことも含め、究極は患者の QOL 向上を目指しておられることが理解されました。

田村氏からは、「副看護部長として APN としての役割開発」と題して、役割発達の異なる APN 認定と管理者の役割を平行実践されてきた経緯を『CNS キャリアラダー』と『病院看護管理者のマネジメントラダー』に沿って整理し、丁寧にお話をいただきました。複雑に絡み合う 2 つの役割をご自身の周囲の状況・資源を的確にとらえ、組織の中で必要とされるタスクを限りある時間の中で势力的にやり遂げてこられたことが理解されました。

申込者 74 名のうち、参加者は 58 名で、43 名（回収率 74.1 %）よりアンケート回答を頂きました。回答者は、50 代、40 代が約 4 割、30 代が 1 割弱、60 代以上が 1 割という構成で、大学教員が 2 割半、看護師等 7 割で、うち専門看護師が 8 割（主に急性・重症患者看護、がん看護）でした。また非会員が 7 割強でした。講演に対しては、両講師の『講義内容の理解』はいずれも 10 割弱が肯定的回答、『研修満足度』および、『今後の仕事で役立つ』はいずれも肯定的回答が 10 割弱でした。ご講演後の意見交換では、管理者との協働でのアプローチの方法として、1) CNS 自身が組織の中での役割を認識する、2) 所属部署と自身の強みを活かして丁寧に実践する、3) CNS 自身の実践力を磨いていく、4) 多職種の専門性を認め、理解するためにもコミュニケーションを大切にすることなどが出てきました。APN が管理者とうまくやっていくために「CNS 自身がやりたいことを優先するのではなく、組織の方針・方向性も理解し求められる役割を発揮すること」が両講師から共通して提示されました。アンケートの記述回答からは、当事者として自身の活動の見直しや活用への意欲が見られ、本セミナーでの学びが、今後の高度看護実践者の実践に活用されることが期待されます。

本研修会は盛会裏に終えられました。最後に、講師、聴衆両者より当日の運営にご協力を頂きましたこと、委員一同、心よりお礼申し上げます。



St. Luke's International University

オンラインセミナー  
高度実践看護師が活躍する組織  
看護管理者が求める高度実践看護師の役割開発

～看護管理者として、APNとしての役割開発～  
「チーム活動におけるAPNの役割」

2025年12月13日(土)13:00-15:15  
聖路加国際大学 老年看護学 助教  
老人看護専門看護師, DNP  
大友 晋



St. Luke's International Hospital

2025年度 聖路加看護学会 高度実践看護開発検討委員会主催  
2025/12/13 オンラインセミナー  
高度実践看護師が活躍する組織  
看護管理者が求める高度実践看護師の役割開発



副看護部長として APNとしての  
役割開発

田村 富美子  
聖路加国際病院  
副看護部長 急性・重症患者看護専門看護師



(担当：柳橋礼子、青木悠、小松崎朗子、山本加奈子、小林成光、渡辺かづみ、吉田智美)

## ■ 庶務からのお知らせ

年度末が近づき、皆さまお忙しい日々をお過ごしのことと思います。新年度に向けて、環境が変わる方も多い季節となりました。ご所属やご自宅の住所変更がございましたら、学会ウェブサイト内の「[会員情報・変更届フォーム](#)」にご入力いただき、事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。

本学会の現在の会員数は 546 名（2026 年 1 月 13 日現在）です。お近くにご関心をお持ちの方や、入会をご検討されている方がいらっしゃいましたら、ぜひお声がけいただき、活動の輪がさらに広がるよう、ご協力いただけますと幸いです。

（担当：五十嵐ゆかり、沖村愛子、青木裕見）

## ■ 会計からのお知らせ

2025 年度も年度末となり、次年度に向けた準備を進める時期となりました。昨年 9 月の学会では、30 周年記念事業も行われ、懇親会には多くの学会員の方が集まり、旧交を温める場となりました。周年行事も終わり、次年度は新たな歴史を刻む年となります。本年 9 月の学会でも様々な企画が予定されていますので、皆様お誘い合わせの上、ぜひご参加ください。

学会活動は、皆様の会費で成り立っています。今年度の年会費をまだお支払いになっていない方は 2025 年度中に納入をお願いします。学会規定では、3 年間年会費を滞納すると除名となります（その際にも未納の会費はお支払いいただいております）。魅力ある学会をつくるために、ぜひ年会費の納入をお願いします。

（担当：林直子、亀田典宏、木村理加）

振り込み先：郵便振替口座

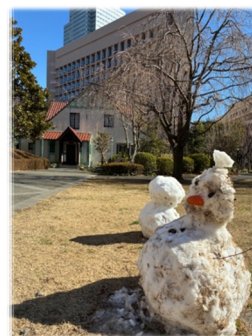
口座番号：00100-8-670371

加入者名：一般社団法人聖路加看護学会

## ■ 編集後記

2026 年 2 月初旬に都内でも雪が舞い降りました。雪景色が珍しい聖路加の地でも数 cm の積雪に喜び、楽しく遊ぶ近隣の子もたちや学生の姿が雪化粧されたトイスラーハウス前の広場に反射していくらか眩しかったです。

普段の姿に小さな変化があれば私たちはその変化を楽しみ感動できると思います。2026 年度のみなさまも小さな変化を楽しんでいけますように。



ニュースレター発行や様々な情報をメーリングリストでお伝えします

メールアドレスが変更された場合は、学会事務局 [slnr@slcn.ac.jp](mailto:slnr@slcn.ac.jp) までご連絡ください

一般社団法人 聖路加看護学会ニュースレター No.72

▶ 発行：2026 年 2 月 28 日

▶ 編集：広報委員会

（賀数勝太 増澤祐子 廣田千穂 池口佳子 海老原樹恵 飯岡由紀子）

▶ 連絡先：〒104-0044 東京都中央区明石町 10-1 聖路加国際大学内

変更届フォーム

